

## ■特定課題セッションⅢ報告

### 「家族に潜在化する貧困—所得、ケアをめぐる不平等」

コーディネーター：田中智子（佛教大学）

現代日本では、深刻な貧困の広がりが見られるが、相対的貧困率などの貧困の把握や、生活保護や各種手当の諸制度にみられるように、あくまで貧困状態の把握及び支援対象は、世帯所得が基本とされている。この場合、例えば、世帯所得が貧困ライン以上であっても、DVなどで夫からお金を渡してもらえない、あるいは自身が働くことができない女性や、虐待によって親から適切に経済的にサポートしてもらえない子ども、その反対に、障害者や高齢者のケアを優先することで、自らの生活水準を低位なものとしているケアラーなど、家族内部に生じる貧困は潜在化することとなる。特に性別役割分業規範のもと、ケアラー役割を期待される女性は、しばしば、経済的資源やパワー、つまり権力、あるいはケアなどの不平等配分の結果、しわ寄せが生じ、貧困状態に置かれるのである。そこで、本セッションでは、3名の会員からの報告、質疑応答、フロアとの共同討議によって、潜在化した貧困の把握に向けて議論を進めた。

報告は、(1)保田真希会員による「家族によるケアと「二次的依存—発達に不安を持つ子を育てる家族に焦点を当てて—」(2)藤原里佐会員による「障害者家族の高齢化に伴う子ども支援の困難—家族内ケアをめぐる限界と社会的支援—」(3)鳥山まどか会員による「子育て世帯の資源配分と「隠れた貧困」—母子世帯の家計からの考察—」の3本で、障害のある子どものケアや母子家庭の子育てなどを巡って、「母親にどのようなしわ寄せが生じているか」という点で共通点がある報告であった。

論点としては、①経済的な問題だけではなく、家族内部の資源や権力の不平等配分と貧困を広くとらえ、子育てやケアを含み、どのような事象を通じて隠れた貧困が生じるのか②不平等配分の結果、家族員の誰にどのような貧困が経験されるのか③それらはいかなる社会的構造や制度のなかで生じるのか。また現行制度はこれらの問題にどのように対応しているのか／していないのか④不平等配分の可視化という点において、どのような研究が求められるのかという点について、参加者とともに協議した。

時間の制約やコーディネーターの力量不足もあり、十分に議論を深めるところまでは至らなかったが、全体で確認できたこととして ①子どもへの影響が表出する手前の段階で、親が貧困の緩衝材的役割を果たしている。つまり、貧困の影響が親に生じた後に、子どもに生じるのである。②しわ寄せや貧困状態に関する本人の認識と客観的な認識はズレがちである。専門的な見地からすれば、社会的支援の介入が必要であっても当事者の認識はそうではない場合も多々生じる③例えば母子家庭などで貧困状態にあり資源が非常に制約されている状況の中では、わずかなしわ寄せであっても危機的状況に陥ることが挙げられる。

今後は、就業構造や家族の社会的位置など大きな文脈の中で本問題を位置づけることとあわせて、現状の日本において不足している家族内不平等の現状がわかるようなデータの収集に向けての方法論的開発が必要だと確認された。